

J1 リーグチーム組織に関する考察

松 原 悟

Abstract J League began in 1993 by 10 teams. J League increased them by 40 teams in 2012. The numerical increase of such a team is a result of the activity of Football Association of Japan and the district Football Association. I can evaluate the numerical increase of such a team at a point called an expanse of the soccer. However, it is predicted that the numerical increase of the team causes a new problem. It is a problem called the decline of the level. It will become the problem of the organization of a player and the company. It is necessary for soccer in Japan to consider it in a new viewpoint about a team organization. In this study, I analyzed an age structure, a position, the place where a player was born, the environment that grew up, the participation situation of the player. This study was intended to discover the new viewpoint that soccer in Japan must have in the future. In the age, three step are thought. I think about the number of people of one team on the basis of 30 people. In the training of the player, the cooperation with a high school and the university is necessary.

1. はじめに

1991年に設立したJリーグは、「日本サッカーの水準向上」、「地域に根ざしたスポーツクラブ」「豊かなスポーツ文化の醸成」を目標として、2011年に20年を迎える。1993年に10チームで開幕したJリーグは、2011年では、43チーム（準加盟5チーム含む）にまで拡大した。また、2012年は準加盟5チームの中から、FC町田ゼルビア、松本山雅FCが昇格し、J1が18チーム、J2が22チームで開催されることが決定している。現在では、青森、秋田、岩手、福島、石川、三重、和歌山、滋賀、島根、山口、高知、宮崎、鹿児島、沖縄の14県にJチームが存在していないが、秋田、石川、滋賀、沖縄の4県では、日本フットボールリーグ（JFL）に所属チームを輩出し、準加盟を目指している。

このようなチーム数の増加は、日本サッカー協会を頂点とし、9地域（北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州）サッカー協会、各都道府県サッカー協会の活動の成果であろう。日本サッカー協会を頂点として、選手のカテゴリーも、I種（大人）、II種（高校生年代）、III種（中学生年代）、IV種（小学生年代）、キッズ（幼稚園年代）、女子と整理し、精力的に活動を展開している成果である。また、Jリーグの理念である「日本サッ

カーの水準向上」,「地域に根ざしたスポーツクラブ」「豊かなスポーツ文化の醸成」を都道府県サッカー協会も共有している以上,各都道府県において,サッカー活動の中心的存在として,Jチームを設立することは,各都道府県サッカー協会の使命にもなっている。将来,各都道府県に最低1チームのJチームが存在することも,遠い出来事ではないであろう。1997年の福島FCのプロ化断念,1998年の横浜フリューゲルス解散という,Jリーグ創設時の困難を乗り越えた結果,身の丈に合った経営基盤の確立が現在の状況に影響を与えているのであろう。ようやく,Jチームの作り方が浸透したといえよう。

このように多くのJチームが存在することは,一方では,レベルの低下や,経営困難な状況のチームを輩出する可能性が,再び高まったとも考えられる。昨今の経済状況,行政の財政難などから,潤沢な資金が得られることは考えられない。Jチームへの正式加盟,J2からJ1への昇格を,勝利主義だけで成果を評価するならば,正式加盟が達成されない,いつまでもJ2でJ1に昇格できない,J2からJ1に降格したなどの結果次第で,会社の存続が危機を迎えてしまうであろう。ベガルタ仙台においても,チーム創設期には,Jリーグ昇格に向けての無理な選手補強のために経営危機を迎え,身の丈に合った経営によって立て直しをはかるものの,J1昇格をなかなか果たせない状況の中では,マスコミ,サポーターからの非難を浴び,J1に昇格すると称賛され,再度J2に降格して結果がでないと非難の対象となった。2011年は4位という過去最高の成績をあげたもの,結果主義を主にすれば,非難と称賛の繰り返しを重ねるしかない。会社の倒産,解散は,スポーツ文化の醸成にとっても大きな影響を与えてしまう。日本においても,Jチームを作る段階から,チームの存続,存在の意義を見直すことをしなければならない。

2011年FIFA女子ワールドカップドイツ大会での優勝は,震災による日本国民を大いに勇気づけ,女子サッカーに対する関心度を大いに高めた。しかしながら,これが準優勝であったらどうであったであろうか。オリンピック種目から除外された女子ソフトボール,金メダルを獲得できないと批判される日本柔道など,マスコミも含めて日本国民のスポーツへの要求第一は勝利主義である。それ故に,日本における競技スポーツマンは勝利にこだわらなければならない状況である。勝てばマスコミも取り上げ,スポンサーもつく,負ければ消えていく。スポーツ文化を醸成するということは,結果に関わらず,スポーツへの関心度が高くなることである。結果が出なくても支えていけるかということが「醸成」ではないだろうか。プロスポーツクラブ先進国のヨーロッパ,南北アメリカにおいても,毎年優勝を争うのは,資金の潤沢なビッグマネーを抱えるクラブであり,それでも多くのチームが存在している。

2012年よりJリーグチームが40チームになることは,すそ野の拡大にとっては大いに賞賛されるべきことであるが,良くも悪くも結果のでるチームは限られている。経営という視

点から、新たな視点を持たなければ、このような数多くのJチームは、存続していけないであろう。チームの解散、会社の倒産は、スポーツ文化の醸成を妨げるものである。チームの方向性、組織を新たに構築してアピールしていくことが肝要である。

そこで、本研究では、このように多くのJチームの存在を可能とするために、2011年J1リーグの所属選手データより、年齢構成とポジション、出生地域と出身母体、構成選手の出場時間から、Jチームが今後どのような方向性を持って組織を形成すべきかを明らかにすることを目的として行った。

2. 方法

2011年J1リーグ終了時点での、選手データより、年齢構成とポジション、出生地域と出身母体、出場時間を集計し、これら3つの観点からJ1チームの組織について考察を行った。尚、集計に際しては、2011年Jリーグ公式記録を参照し、年齢に関しては、2011年での年齢とした。対象選手の基本データは、表1に示すように、対象選手538名であった。

表1. 年齢・身長・体重 (2011年J1全体)

| | 年齢 (歳) | 身長 (cm) | 体重 (kg) |
|-----------|-----------|------------|-----------|
| 総数 (n) | 538 | 538 | 538 |
| 平均 (M±SD) | 25.5±3.82 | 178.2±5.27 | 71.9±5.10 |
| 最大 | 37 | 198 | 93 |
| 最小 | 16 | 162 | 57 |

3. 結果

3.1 年齢構成とポジション

(1) 年齢構成

J1チームの年齢は、図1に示す通りであった。25歳が47人と最も多く、以下24歳40人、23歳、26歳39人の構成であった。

(2) ポジション

ポジション別の年齢、身長、体重に関しては、表2に示すとおりであった。また、チーム別のポジション別選手構成は表3に示す通りであった。

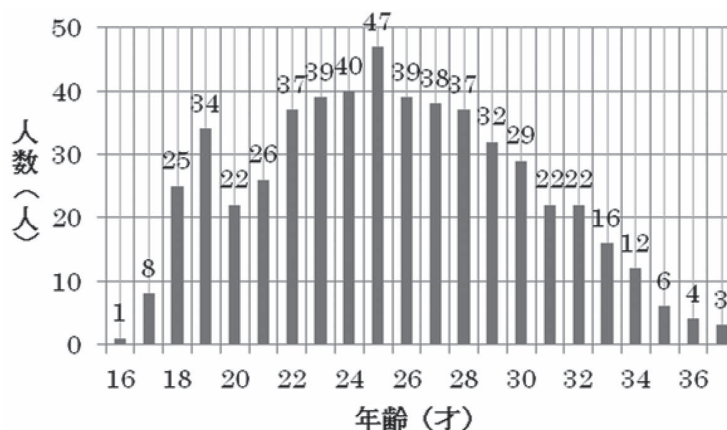


図1. 年齢構成 (2011年J1)

表2. 年齢・身長・体重 (2011年J1 ポジション別)

| | GK | | | DF | | | MF | | | FW | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|
| | 年齢 (歳) | 身長 (cm) | 体重 (kg) | 年齢 (歳) | 身長 (cm) | 体重 (kg) | 年齢 (歳) | 身長 (cm) | 体重 (kg) | 年齢 (歳) | 身長 (cm) | 体重 (kg) |
| 総数 (n) | 75 | 75 | 75 | 155 | 155 | 155 | 202 | 202 | 202 | 106 | 106 | 106 |
| 平均 (M±SD) | 24.7±5.89 | 185.5±3.45 | 78.1±5.03 | 26.3±5.00 | 179.4±5.66 | 73.4±5.74 | 25.5±4.95 | 174.6±5.06 | 68.4±5.23 | 24.8±4.73 | 177.9±6.55 | 71.9±6.06 |
| 最大 | 37 | 198.0 | 93.0 | 36.0 | 193.0 | 93.0 | 37.0 | 187.0 | 89.0 | 34.0 | 194.0 | 86.0 |
| 最小 | 16 | 179.0 | 65.0 | 17.0 | 162.0 | 60.0 | 17.0 | 162.0 | 58.0 | 18.0 | 165.0 | 57.0 |

表3. チーム別・ポジション別構成 (2011年J1)

| 順位 | チーム名 | GK | DF | MF | FW | 計 |
|----|-----------|----|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 柏レイソルズ | 3 | 8 | 12 | 3 | 26 |
| 2 | 名古屋グランパス | 4 | 8 | 13 | 4 | 29 |
| 3 | ガンバ大阪 | 4 | 10 | 11 | 8 | 33 |
| 4 | ベガルタ仙台 | 4 | 8 | 10 | 7 | 29 |
| 5 | 横浜F・マリノス | 4 | 10 | 11 | 4 | 29 |
| 6 | 鹿島アントラーズ | 4 | 6 | 13 | 5 | 28 |
| 7 | サンフレッチェ広島 | 4 | 5 | 16 | 4 | 29 |
| 8 | ジュビロ磐田 | 4 | 7 | 10 | 6 | 27 |
| 9 | ヴィッセル神戸 | 5 | 11 | 12 | 7 | 35 |
| 10 | 清水エスパルス | 3 | 9 | 10 | 9 | 31 |
| 11 | 川崎フロンターレ | 6 | 10 | 10 | 6 | 32 |
| 12 | セレッソ大阪 | 4 | 8 | 14 | 4 | 30 |
| 13 | 大宮アルディージャ | 4 | 9 | 10 | 5 | 28 |
| 14 | アルビレックス新潟 | 6 | 10 | 11 | 5 | 32 |
| 15 | 浦和レッズ | 4 | 9 | 11 | 7 | 31 |
| 16 | ヴァンフォーレ甲府 | 4 | 9 | 9 | 8 | 30 |
| 17 | アビスパ福岡 | 4 | 9 | 8 | 8 | 29 |
| 18 | モンテディオ山形 | 4 | 9 | 11 | 6 | 30 |
| | 計 | 75 | 155 | 202 | 106 | 538 |

3.2 出生地域と出身母体

(1) 出生地域

出生地域に関して、日本サッカー協会 9 地域（北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州）協会、及び外国籍選手についてまとめたものが、図 2 である。関東が最も多く、次いで関西、東海、外国、九州の順であった。

(2) 出身母体

出身母体についてまとめたものが、図 3 である。Jユースとは、Jリーグの下部組織出身、クラブとは、Jリーグの下部組織以外のクラブチーム出身者である。

高校の部活動出身者を対象に、高校の所属する日本サッカー協会 9 地域（北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州）についてまとめたものが、図 4 である。関東が最も多く、次いで、東海、九州の順であった。

大学の部活動出身者を対象に、大学の所属する日本サッカー協会 9 地域（北海道、東北、

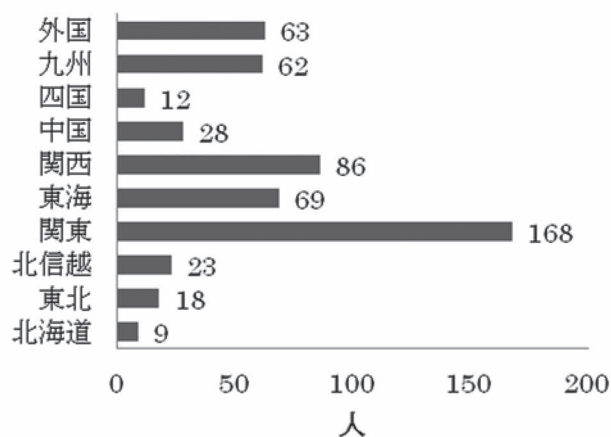


図 2. 出生地域 (2011 年 J1)

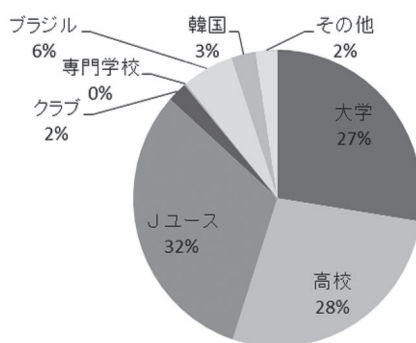


図 3. 出身母体 (2011 年 J1)

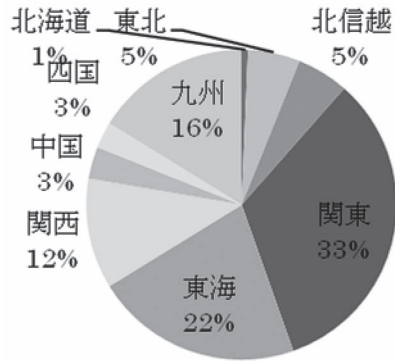


図 4. 高校出身者の地域 (2011 年 J1)

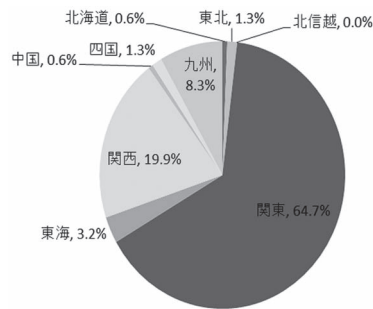


図 5. 大学出身者の地域 (2011 年 J1)

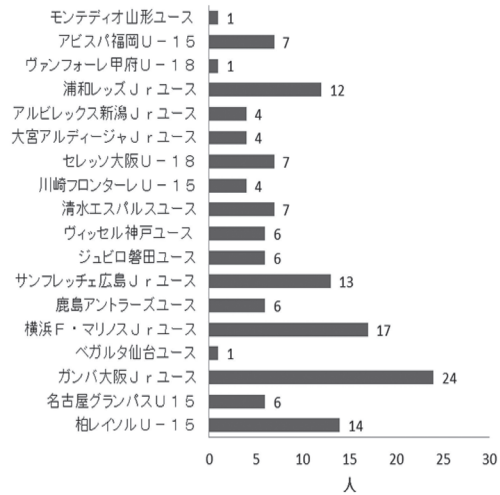


図 6. Jユース出身者 (2011 年 J1)

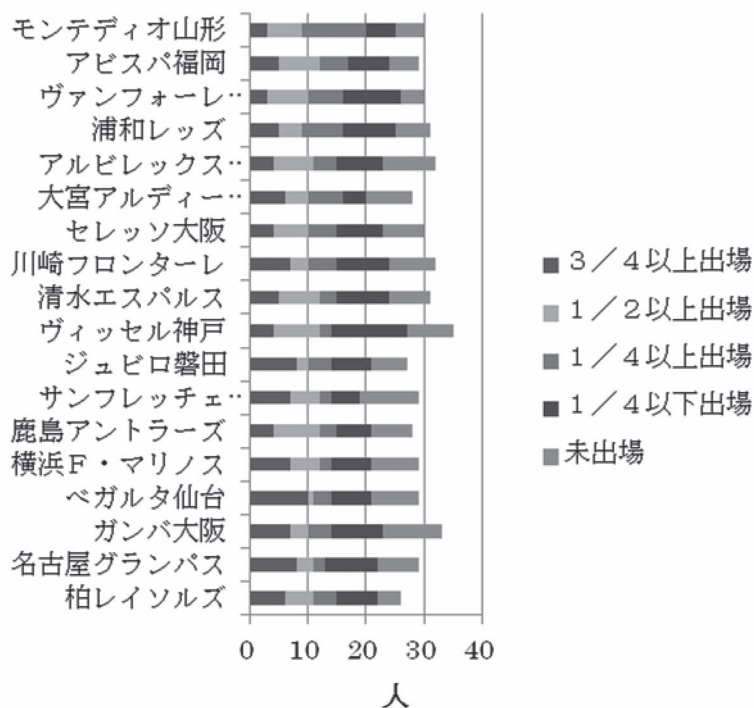


図7. チーム別選手出場割合 (2011年J1)

北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州)についてまとめたものが、図5である。関東が最も多い割合を示している。

J1の下部組織出身者をチーム別に集計したものが、図6である。ガンバ大阪が最も多い24人であり、10人を超えるチームは、横浜マリノス17人、柏レイソル14人、サンフレッチェ広島13人、浦和レッズ12人であった。

3.3 出場割合

各チームの選手のリーグ戦における出場時間を、出場時間3/4以上、1/2以上、1/4以上、1/4以下、未出場に分類したものが、図7である。

4. 考察

4.1 年齢構成とポジション

発育発達の成長過程により、身長伸びが安定したのちに、筋力がつき、大人としてのしっかりとした身体が身につくのは20歳前後と言われている。高校・ユース年代では技術、戦

術能力を身に着け、20代前半では、強くてたくましい選手が活躍する。その後、体力に関しては向上は見られないが、経験によって得られた戦術能力が、身に付き成熟を迎える。サッカー選手においては、前者が20歳前半、後者が28歳前後と言われている。2011年J1リーグの年齢構成も、25歳をピークに、その後は減少をたどり、30歳前半でJ1レベルでは限界が来る。

高校の部活動、Jユース出身者は、18歳でプロ選手となるが、その時点では、肉体的強さの面で即戦力とはいえず、トッププロの中で、最終的なトレーニングを経なければならない。ユース年代の選手は、最低2~3年間は、契約チームで育成する状況であるので、そこで、戦力と判断されなければ解雇される。そのため、19歳の割合が34人と多いにもかかわらず20歳では22人と減少するのは、J1において最初の選手としての適性の判断がなされると考えられよう。

25歳前後においては、肉体的なピークを迎えた選手が主力となり、その後、体力だけで戦うだけでなく、卓越した戦術能力、駆け引き、リーダーシップなどを身に着けたものがチームの中核となっていくことがうかがえる。2度目の適性判断が行われる時期を迎える。30歳を過ぎると肉体的衰えから、3度目の適性判断が行われる。

J1のプロ選手集団は、20歳前後から30歳前後の10~15年間で構成員であり、その評価は、20歳前後、25歳以降、30歳以降の3段階で評価されることが考えられる。

ポジションについては、GKは平均185cmでその変動幅も少ないことから、GKとして採用される場合は185cmは欲しいところである。DF、MF、FWのフィールドプレーヤーは、身長の変動幅が大きく、160cmの選手から180cm後半の選手まで多様である。これは、センターバック、ターゲットプレーヤーと呼ばれるフィールドのセンターラインでプレーする選手には「高さ」が求められ、サイドでのプレーヤーには「高さ」の前に「スピード」、「スタミナ」が優先されるからである。

プロサッカー選手としての体格的評価としては、GKは185cmが求められ、フィールドプレーヤーには「高さ」を優先順位の1位として考慮する選手、「スピード」「スタミナ」を優先順位の1位として考慮する選手に分けることができよう。タイプを考慮した選手の獲得、育成が求められる。

チームのポジション別人数をみると、30名前後の構成員となっている。柏レイソルは最も少ない26名で2011年J1優勝を果たした。企業理論で考えれば、少ないであろう人件費で最大の成果を果たしたことになる。Jリーグ発足当初は、各チームがどのくらいの人数で構成すべきか不明確なため、40名近い選手構成のチームが存在するなど、非効率的であったが、30名前後というところが、目安となってきているようである。

ポジション別で構成を考えると、GK 4 名、DF 10 名、MF 10 名、FW 5 名程度が目安となるのではないだろうか。さらに、フィールドプレーヤーに関しては、「高さ」を優先する選手、「スピード」「スタミナ」を優先する選手が、各ポジションで半数程度の割合であることが理想ではないだろうか。また、能力の高い選手は限られた存在であることから、1 人の選手が2 つ程度のポジションをこなせることも必要であろう。

組織という観点から年齢段階では、プロ選手としての評価は、第1段階 20 歳前後体力的評価（特に強さの部分で）、第2段階 25 歳前後体力、戦術、精神力での総合評価、第3段階 30 歳以降の体力的評価（衰え）での、査定、評価が考えられる。このようにチームには3 つのカテゴリーが存在していると考えられよう。また、評価だけでなく、次のカテゴリーを目指しての選手育成に心掛ける必要があるだろう。

選手のポジション別構成では、GK 2、DF 10、MF 10、FW 5 の 27 名を基準とし、GK を除く各ポジションには、「高さ」優先、「スピード」「スタミナ」優先の選手を半数ずつ構成することが理想ではないだろうか。

4.2 出生地域と出身母体

出生地域に関しては、関東地方が 168 名、関西地方が 86 名と最も多い。人口集中の点からもやむを得ないが、北海道、四国、東北は少なく、地域からの育成という点では、これらの地域は、育成の強化を図るべきである。一方、関東、関西の育成組織の確立した J ユースや高校がこの地域の選手をユース段階から引き取る状況も存在している。有能な選手の流出は、地域間の格差を生み出している。

出身母体に関しては、J ユース出身者が最も多い。J リーグの理念でもある選手を自前で育成していくという成果があらわれている。しかし、大学 27%、高校 28% も無視できない割合である。諸外国のプロサッカー選手は、全てがプロチームの育成より成り立っていることから、この状況は日本の特徴といってよい。日本でのスポーツ選手育成においては、伝統的に学校体育・部活動が果たしてきている。また、教育水準、教育への保護者の関心から、このような諸外国にない状況が発生している。J リーグ発足当初は、J リーグと高校、大学の間に対立も見られたが、20 年経過しても高校・大学の占める割合が多いということは、J リーグと高校・大学との連携による共存共栄が不可欠であろう。前述した査定の段階で考慮すれば、J リーグ指導者は、ユースからトップ昇格できない選手の処遇、進路をどうするか、高校・大学の指導者が、どの段階からプロの世界に入っていくのかをそれぞれ理解し、共存共栄をはかるべきである。

高校の部活動から J リーガーになる地域は、関東、東海、九州出身者が多数を占めている。

高校の大会では、盛岡商業、青森山田の活躍もあったが、常時好成績を取めている地域が多く、Jリーガーを輩出している。Jチームが多数存在する現状では、他の地域のレベルアップを図らなければ、Jチームは作ったものの、選手は他の地域の出身者ばかりになってしまう。ベガルタ仙台は29名の選手中東北関係は3名、モンテディオ山形は30名中1名という内容である。Jチームが各地域に存在することは、各地域の育成との結びつきを強くしなければ、存続していく点において必要であろう。

大学の部活動からは、関東の大学出身者が圧倒的多数を占めている。全国から優秀な選手が集まる関東に集中するのは当然の結果といえる。Jユースから大学に進学し、卒業後にJリーガーとなった選手が22名存在する。日本の特徴として、Jユースからプロへの道筋と共に、Jユースから大学進学というルート、大学から社会人、又はJリーガーとなる道筋が存在している。関東の大学では、Jユースから大学選手となる割合が30%を超える状況となっている。ここでも、Jチームが多くなるほど、地域の大学との連携も模索すべきであろう。一方では、地域の大学での選手育成も今後の課題といえる。

J1チームにおけるJユースの育成状況は、チーム間の格差が大きい。ガンバ大阪、横浜マリノス、柏レイソル、サンフレッチェ広島、浦和レッズなどは、育成に成功している状況である。特に地域としての基盤が弱いサンフレッチェ広島がJ1を維持できているのは、ユースの育成に成功しているからであろう。また、柏レイソルは、J2から復帰直後にJ1優勝という快挙を成し遂げたが、J2から1年での復帰、2011年のJ1優勝、世界クラブ選手権4位などの好成績は、自前で育てた選手の活躍大である。高校、大学との共存も大切であるが、Jリーグチームの選手構成の点においては、30名前後の選手中10名前後は、自前で育てた選手構成になってほしいものである。

4.3 出場割合

チームの戦い方は、監督、選手の能力、コンディション、チームワークなど様々な要素が影響している。しかし、単年度に限って考えれば、安定して戦うことが必要である。そのため、チームの核となる常時出場している選手が必要である。全てのチームが常時出場している、半分以上出場している選手をあわせると10名程度である。しかしながら、常時出場している選手をみると、成績下位チームは少ない傾向にある。当初のプランと異なる状況、怪我、コンディション不良、意思統一不足、核となる選手がいないなど、様々なことが考えられるが、常時出場する選手は5名以上必要ではないだろうか。一方で、常時出場している選手が多いにも関わらず成績に反映されない場合は、選手のパフォーマンス低下が考えられる。

ベガルタ仙台は、今年4位というチーム最高の成績をおさめた。震災等によるメンタル面もあったであろうが、常時出場している選手が10名で、その年齢も25歳から30歳に集中している。チームが円熟期を迎えているといえよう。一方では、継続するうえでの後に続く選手を養成しなければ、現状の選手のピークが過ぎれば、成績は下降するのみである。

名古屋グランパスは、ここ数年結果を伴ってきているが、潤沢な資金を元に、良い選手を移籍等で獲得することでチームパフォーマンスを維持している。鹿島アントラーズは、2011年に限って言えば、2、3年前のピークに比較して、選手の年齢が上がり変革期を迎えている。その中でも、20歳前後の選手を融合させ、次世代に向けてのチームづくりを欠かしていない。

ヨーロッパ、南米でも、常時優勝争いをしているビッグネームのチームは、潤沢な資金を元に、常にピークの選手を獲得することによって成績を維持している。一方資金的に難のあるチームは、自前の選手や若手を活用することで、チーム力の維持を図っている。自前の選手や若手の選手は、良いパフォーマンスを発揮することで、ビッグクラブからのオファーを目指すという状況である。

組織という点から、チームを考えると、単年度においては、核となる常時出場する選手は5名が必要であり、ほとんど出場する選手と合わせて、構成選手約30名中10名は必要である。また、チームの資金力から、選手獲得型、選手育成型を明確に持つべきであり、特に育成型においては、評価基準の3段階（20歳前後、25歳前後、30歳前後）のカテゴリーで、選手起用を考慮に入れなければならない。

5. まとめ

J1リーグの組織について、年齢構成とポジション、出生地域と出身母体、出場割合から検討した結果、以下のとおりである。

- ・チーム内での選手評価は、20歳前後、25歳前後、30歳前後の3カテゴリーを考慮すべきである。
- ・チームの構成員は27名から30名前後とし、GK 4, DF 10, MF 10, FW 5を基準として、「高さ」と「スピード」「スタミナ」の優先順位をもって構成する。Jチーム数増加に伴い、選手は2つのポジションをこなせる能力に配慮する。
- ・特にチーム数増加に伴い、高校・大学との共存共栄、育成基準を共有する。
- ・チームが自前の選手を育成し、その構成選手は10名程度を目標とする。
- ・単年度に限れば、チームの中核となり常時出場する選手は5名前後、ほとんど出場する選手とあわせて10名程度を確保する。

- ・中長期的なビジョンとして、全てのチームが勝利至上でなく、補強型、育成型なのか、又は、常時優勝を争うチームなのか、中堅として存在するのかなど、チームの優先すべきポリシーを明確に持つ。

企業において、マーケティングの研究はかなり高度なものとなってきている。「消費者」に対して、第 1 段階では、「製品 Product」「場所・経路 Place」「プロモーション Promotion」「価格 Price」、第 2 段階として、「企業の資源と目標」「企業のおかれている状況」「経済的環境」「文化的・社会的環境」「政治的・法律的环境」を考慮することをスタートとしている。1993 年に 10 チームでスタートした J リーグであったが、2012 年は 40 チームとなる。発足当初の乱立とは異なる状況でのチーム数増ではあるが、有能な選手は海外に進出し、J リーグのレベル低下も懸念される。J リーグが単なる勝利至上主義でチーム運営を行うだけでは、成果の上がないチームは淘汰されるのみである。スポーツ文化の醸成といった点からも、解散や倒産は阻止しなければならない。そのためにも、これまでの 20 年の蓄積を生かして、J 各チームの組織、存在意義、方向性を明確にしていくことは必要であろう。今後は、J2、他のプロスポーツなどから、スポーツ文化、地域スポーツに研究領域を広げていきたい。

参考文献

- フロムワン編 (2008) 「愛するサッカーを仕事にする本」アスペクト
グローバル・マーケティング研究会 (2009) 「日本企業のグローバル・マーケティング」白桃書房
五島祐治郎 (2009) 「大学サッカーの断想」晃洋書房
濱口博行 (2010) 「日本はサッカーの国になれたか。電通の格闘」電通
広瀬一郎 (2010) 「極私的サッカー見聞録」東邦出版
今福龍太 (2008) 「ブラジルのホモ・ルーデンス」月曜社
リーグ公式サイト (about J) <http://www.j-league.or.jp/aboutj/> 2011 年 12 月
松原 悟 (2011) 「選手構成からみた高校・大学サッカーの現状東北学院大学教養学部論集第 160 号: 39-35」
宮澤永光他 (2009) 「現代マーケティング」ナカニシヤ出版
文部科学省ホームページ (スポーツ スポーツの振興) http://www.mext.go.jp/a_menu/05_a.htm 2011 年 11 月
谷塚 哲 (2008) 「地域スポーツクラブのマネジメント」カンゼン